

大谷大学・東北師範大学 共同研究会報告

桂 華 淳 祥

本研究活動の一環として、研究班員の所属する大谷大学と中国・東北師範大学の共同研究会が2000年9月6・7日の両日、東北師範大学（中国吉林省長春市）において開催され、双方の研究発表を中心に意見の交換が行われた。研究発表の詳細はそれぞれの報告（木場・李両氏の報告は本紀要に掲載）に譲るとして、ここではその際になされた意見交換の一部を紹介して研究会の報告とし、あわせて今後の課題について若干触れておきたい。

なお報告の前に、本研究班が組織され、この度の研究会が開催されるにいたった経緯、および本研究班の活動も簡単に紹介しておく。

一、本研究会開催にいたる経緯

本研究の萌芽となったのは、本学真宗総合研究所1985・86両年度の共同研究「東本願寺中国布教の基礎的研究」である。これは、それまでもすると侵略の手先という評価の強い20世紀前半期における東本願寺の大陸布教を、その善悪はさておき、先人の行ってきた活動を事実は事実として確認するために、できる限りの史料の蒐集と整理を目指すものであった（成果は同研究所『研究紀要』5号に報告）。次いでこの研究を継続発展させたものとして、1989・90両年度にわたって同研究所の共同研究「近代における真宗の対アジア布教の展開過程」を組織し、史料蒐集を継続するとともに、それまでに蒐集した史料の詳細な分析を行った（成果は『研究紀要』9号に報告）。またほぼ時を同じくして組織された龍谷大学仏教文化研究所共同研究「海外における浄土真宗開教使の語学研修と布教活動」（1990年度）「近代のアジア地域における浄土真宗の文化交流に関する研究」（1991年度）とも連携をとりながら、史料の蒐集とその分析を進めてきた（成果は前記二報告を含め1992年に法蔵館より『アジアの開教と教育』を刊行して報告）。さ

らに1993・94両年度には本学真宗総合研究所の共同研究「真宗によるアジア開教・教育事業記事集成」を起こし（成果は『研究紀要』12号に報告）、研究活動を継続してきたのであるが、これらの過程で、日本国内における史料蒐集や研究会などの活動だけでは不十分であることが次第に明らかになってきていた。

一方、本学においては近年、教育研究の国際化をめざして外国の研究機関との交流が促進され、その一環として1994年には中国・東北師範大学との提携校関係が成立した。周知のように東北師範大学は本研究の対象地域にあることから、1996・98の両年の夏、その協力を得て木場氏が史料調査に赴いたが、その際、本研究と目指すところを同じくする研究者も多く在籍されることを知り得た。そこで共同での研究活動が提案され、1998年中に木場氏をはじめ研究班の代表メンバーが東北師範大学との詰めに赴き、本共同研究班が組織された。

研究班初年度の活動としては、おもに国内在住の研究者を招いて研究会を開催（末尾「1999年度研究会日程」参照）し、本課題に関連する研究動向の把握に努める一方、東北師範大学の呂元明氏・林嵐氏が来学の折には、研究会とともに双方の活動情況の報告や意見交換を行うなど共同研究会の準備にも取りかかった。また第二年度に入ってから2000年4月27～29日に、東北師範大学より程舒偉・逢増玉両氏を本学に迎えて研究会を行い（程・逢両氏の報告も本報告書に掲載）、あわせて研究活動全般にわたる詳細な打ち合わせも行って、今回の共同研究会開催となったのである。

二、研究会の概要

会場 東北師範大学歴史系会議室

日程 9月6日 午前10時～研究発表～10時50分～質疑応答～12時10分

近代中国東北地域における宗教研究の課題 木場明志
午後3時～研究発表～4時～質疑応答～5時30分
日本仏教と植民地侵略 呂元明

9月7日 午前9時15分～研究発表～9時50分～質疑応答～10時

「満州文壇」の一考察——“藝文志派”を中心に—— 李青
午前10時10分～研究発表～11時25分～質疑応答～12時10分
偽満時期日本帝国主義利用仏教侵華問題 王魁喜

出席者 大谷大学 藤島建樹 河内昭円 木場明志 李青 桂華淳祥
東北師範大学 呂元明 王魁喜 程舒偉 逢増玉 崔丕 林嵐 于群
張民軍 勞瑞勤 周頌倫 (通訳)
歴史系院生学生 24名 中文系院生学生 7名

意見交換の内容(要約) (中)は中国側、(日)は日本側メンバーの発言

(1) 本研究のテーマについて

(中) 日本仏教界の東北での活動は日露戦争(1904)以降になって発展していった。このことは史料にみられる寺院数の増加によって知られる。しかしそれよりも前、日本が東北侵略を開始した日清戦争(1894)の時から、日本の仏教界もそれに追従する形で来華している。それなのになぜ日清戦争を含めて考えないのか。日清戦争の時期を含めて考えるべきではないか。

(日) 従来、日露戦争から軍隊を鼓舞するため僧が同行したとされてきたが、もちろん僧の動きはそれ以前からみられる。たとえば東本願寺の「事務報告」では「現地では戦没者追弔を行い、日本軍とともに帰国した」とある。ここでは便宜上、時期を限っただけで、当然以前のこともみる必要があると思う。

(中) 時期を限った方が研究がしやすいということから、扱う時代をあまりに限定すると、部分的な姿しかみえてこないのではないか。

(日) 扱う時代、またそれ以前の歴史について、基本的な事柄(例えば満州国であるなら、その国家成立の過程、国家の組織、国家としての実態)を我々はまだ理解していない部分が多くあるので、それを理解しておく必要がある。そうでないと、指摘されるように成果が出て空論になる恐れがある。

(中) 近代中国における対外関係を研究する上で、宗教の問題、特に外来宗教の問題が重要であることは中国においても早くから認識されており、その研究は1950~60年代にかけて盛んであった。しかしそれは英国関係のものがほとんどである。その点、日本の宗教の活動を扱おうとする本研究は、その欠を補うものとして中国近代史にとっても有意義であると思う。そこで近代中国における日本の宗教活動の問題を考えると、それは廈門事件、すなわち1900年、ちょうど義和団事件が起きているとき、廈門で日本仏教の寺院が火災にあったという事件から始まっているのではないか。扱う時代の範囲と同様、東北という一地域だけでなく、中国と日本との関係という大きな観点で考える必要がある

ように思う。

(2) 仏教界の動向(交流)と政治との関係について

(日) 日中兩國の間には、仏教界の交流として楊仁山と南条文雄との関係のよう
に有意義なものもある。本研究で扱おうとする時代・地域においてもそのよ
うな関係があったのではないか。例えばハルビン極楽寺の如光。清末の仏教が
衰微していた、また社会から遊離していた(少なくとも日本仏教界はそう思っ
ていた)ところに日本仏教が入ってきて、宗教が社会の近代化に役立つこと、思想研
究の対象として重要なことなどを説いた。それに呼応した人物のように思われ
る。従って中国の近代化を目指す動向とも関係するのではないか。

(中) 日本は仏教を利用して満州仏教会を作り、日本の統治政策にとって有益
と思われる人物、協力的な人物を日本に派遣し協力体制を築いていった。如光
を筆頭とした6名の訪日団はその一例、つまり日本に利用されたのだといえ
よう。

(日) 如光は日本で学習した。その時に近代化のことを考えたであろう。他の
僧は教義について研究を深めたが、そこに中国仏教の姿はあまりみあたらな
かった。だから日本仏教に目が向けられ、その結果として、日本に利用され
ることが多かったように思う。

(日) 日本の仏教宗派の中には、中国にないもの、つまり仏教が中国より伝来
してから日本国内で独自の展開をしてきたものがある。それが中国に入ってきた
ので、衰退していた中国仏教をもとの姿に戻そうとする人々に影響を与えた
部分があるのではないか。或いは、従来の中国仏教との間に齟齬をきたしたと
いうところもあるのではないか。

(中) 日本仏教は権力と結びついて本来の姿を失っていったのではないか。先
に挙げた廈門事件は、日本の僧侶自らが放火したといわれており、それは台湾
総督府の指示によったとするものと僧侶が発案したという二つの史料がある。
仏教界が積極的に働きかけたかどうかはわからないが、いずれにしてもこの事
件は、仏教と政治が関わっていることを示している。

(日) 布教活動は個人の熱意が先行し、それを教団が後押しする。そして場合
によって権力者(国家)がそれを利用する。こういう形で行われることが多いよ
うに思う。

(中) 言われるように、宗教は一般的には侵略者ではない。ただその主導権を

握っていたのは誰か、どのような機関かということが問題ではないか。

(日) 当時(満州時代)、日中双方の仏教が並存していた。そしてそれぞれ団体を結成し、それぞれの民族に対して布教していた。ただ、並存を許したのは統治政策によるところである。これは民生部大臣が管理していたことで明らかである。

(中) 仏教だけが利用されたのではないが、主たるものは仏教であった。元来仏教は先に示されたような文化交流の分野であったが、それが変化していった。一番大きな変化は国家に利用されたことであろう。それは維新期の記録(江藤新平・岩倉の提言)によって知られる。

(日) 宗教教団が行政(国家)の肩代わりとして行っていた事業もあった。例えば各宗派(寺院)で行われている教育活動である。ただ、一面でそれは日本人に対して「中国に渡っても教育が受けられる」という宣伝になっていた。

(中) 教育について言えば、中国人が日本系列の学校で学ぶことは中国政府の反感をかうこともあった。当時(満州時代)の日本人に対する教育と中国人に対するそれとの異同も考えなければならない。

(3) 今後の研究方法について

(中) 日本の仏教が中国内で行った活動、起こした事件に就いての研究はこれからである。日本ではすでに研究が進んでいるようであるが、まだ総合的なものとはなっていないと思われる。総合的に研究するにはまず事実の確認が必要であり、そのためには史料の蒐集が最も重要である。その点で我々はまずこちら(中国)にある東北地域の史料収集に努力しなければならないと考える。

(中) 一つの史料で結論を出すことは慎まねばならない。多くの史料によって事柄をみていくことが必要である。つまり「ありのままの姿を明らかにしたい」と言うのが我々の目指すところであると考え。

また意見交換を進めるなか、語彙の問題として「従軍僧」というものが浮かび上がってきた。漢語としてのその文字の意味に加え、当時の社会に身を置かれていた呂・王両先生の「僧だと名乗るものが実際に武器を持っていた」との体験から、日本文史料にみえる「従軍僧」を戦闘員と認識されているのである。もちろん日本の宗教界が使用する語彙「従軍僧」は、軍人を慰労激励し、また葬祭を行うために軍隊に帯同している僧のことであり、そのことを説明して誤

解を解くことができた。

三、成果と今後の課題

以上、研究会での意見交換の内容を簡条書きで紹介してきたが、そこには班員の間にある視点の違いが看取できる。これは班員個々の関心の相違から生ずるものであるが、日本と中国という研究環境やその背景の違いにも起因していることも伺い知られる。今回の共同研究会の最大の成果は、同じテーブルについて話し合い、このような相違点を明らかにし共有できたことにあるといえる。

したがって今後の課題としては、明らかになった問題点を踏まえて多角的な視野に立った検討の必要性が挙げられる。特に宗教活動をテーマとする本研究では、日本の対外政策・移民政策という観点からだけでなく、例えば、中国に渡った日本仏教が、中国の仏教界や社会に影響を与えたり、翻ってそこから学ぶということがあったのか、またそれによって日本仏教が変化したのかなど、中国近代の社会と日本近代の仏教との関係や、外来勢力下に置かれた中国側宗教界の動向といった方面からのアプローチである。そのためには今回のような相互の意見交換の機会を重ね、日中共同での史料収集とその解説分析を継続して行うことが重要であるが、さらには、複雑な国際社会の動きをもっていった事柄であるから、日本・中国以外の第三者の視点及び史料を加えていく必要があるように思う。今後の成果に期したい。

なお、本共同研究会に先立ち、木場・桂華両名は9月4・5両日長春に滞在し、東北師範大学の先生方のご助力を得て、東北師範大学図書館・吉林省図書館・長春市図書館・吉林省社会科学院満鉄資料室に於いて史料を閲覧させていただくことができた。これも共同研究の成果の一つである。

以下には、参考のために初年度に行った研究会の記録を付す。

【1999年度研究会記録】(会場はいずれも大谷大学)

1999年

4月28日 午後2時30分

中国東北地区本願寺別院跡地調査報告

大谷派大阪教区教化センター主事 鹿崎正明

6月23日 午後4時10分

海外神社の研究——研究の経過と現状、および中国東北地域における調査研究の見通し——

神奈川大学教授 中島三千男

7月14日 午後4時10分

日本宗教の海外布教——新宗教の事例から研究の枠組みを考える——

東京学芸大学教授 藤井健志

12月3日 午後4時10分

中国東北地域研究の現状および今後の課題

東北師範大学中文系教授 呂元明

12月8日 午後5時

海外布教と日語学校

同朋大学教授 槻木瑞生

12月22日 午後6時

小栗栖香頂と清末仏教

東京大学大学院博士後期課程単位取得退学 陳継東

2000年

3月17日 午後1時

中国東北地域研究の課題

東北師範大学外国語学院助教授 林嵐

3月23日 午後4時

東本願寺千島布教から海外布教研究の視座を考える

プリンストン大学大学院修士課程 マイカ・アウアバック